

つながりを未来へ

歴代地域医療連携室室長が大切に育んできた
「地域の先生方とのつながりを大切にし、信頼で結ばれる連携を築いていく」という思いを引き継ぎ、
この度「絆」は100号という大きな節目を迎えました。

創刊以来、地域の先生方とのつながりを大切にしながら、
当院の医療技術や診療体制の現状をお届けし、一歩ずつ歩みを重ねてまいりました。
その歩みを支えてくださったのは、日頃より当院を支えてくださる地域の皆さまとの信頼の絆です。
医療を取り巻く環境が大きく変化する中でも、
顔の見える連携、互いを理解し支え合う関係づくりの大切さは、これからも変わることはありません。
これからも当院キャッチコピーのとおり、「いのちと、ぎゅっと。」
地域の皆さまとともに歩み、地域医療を支える情報発信の架け橋として、想いと絆を未来へつないでまいります。
100号から始まる新たな一歩として、これからも地域の皆さまとともに歩み続けます。

いのちと、ぎゅっと。

思わぬ病気やケガによって、今までどおりの日常に変化が起きる。
そんな時、ぎゅっとする力が、人を救う。私たちはそう信じています。

ぎゅっと、手をつなぐ。
大切なのは、患者さんと手を取り合いながら、チームでともに進むこと。
京都第一赤十字病院には、充実した教育・研修を受け、
多くの実績を積んできたスタッフが多数在籍。診療科や部署の垣根を超えて協力し合い、
患者さんごとのさまざまな症状に適切に対応します。

ぎゅっと、抱きしめる。
患者さんの安心を支えるのは、医療技術だけではなく。
私たちは、心地よい環境や会話からも
患者さんの不安を軽減し、日々の療養をサポートします。
すべては、街の人々のいのちと安心を支え続けていくために。

これからも私たち京都第一赤十字病院は、
患者さん一人ひとりのいのちと真摯に向き合い、質の高い医療をお届けします。



京都第一赤十字病院

日本赤十字社

いのちと、ぎゅっと。

KIZUNA

京都第一日赤だより

Vol.100 記念特集 ～これまでの歴史に思いを馳せて～

夏号

vol.100
2026.7



ご縁があり、2006年に御寺泉湧寺のご住職にご揮毫いただいた、「絆」の文字を受け継いでいます。
左：現地域医療連携室室長 岡本和真 右：院長 大辻英吾



創刊の背景とこれから

院長からのご挨拶

広報誌「KIZUNA」Vol.100 記念号 発刊にあたりご挨拶申し上げます



院長
おおつじ えいご
大辻 英吾

地域に信頼される最高の基幹病院を目指して

当院は 1934 年 11 月に日本赤十字社京都支部病院として開設され、1943 年 1 月から現在の京都第一赤十字病院という名称に変更されました。戦後は進駐連合軍の兵站病院として接収命令を受けましたが、順調に増床を繰り返して最大で 745 床を有する大規模病院となりました。その後、1997 年から 2012 年までに A、B、C 棟の建て替えを行い、許可病床数 602 床の現在の姿となりました。その間、救急医療に取り組み 1997 年に救命救急センターに指定されました。現在は救急科医師 15 名、救急救命士 9 名を配置して毎年 7,000 台以上の救急車を受け入れています。また、24 時間体制でリスクを伴う分娩が可能となる体制を整えて 1997 年に京都府初の総合周産期母子医療センターに指定をされました。2023 年に NICU・GCU を移転・拡充して更にレベルの高い周産期医療を行っています。

当院は日本赤十字社の病院として従来から災害医療に力を注いでおりますが、1997 年に京都府基幹災害拠点病院に指定され、府内の 12 の災害拠点病院と連携し様々な研修・訓練を企画運営しています。常備救護班として、DMAT 隊員 39 名が救護班登録し、現在 5 隊・76 名の陣容で災害時の対応に備えております。

この長い歴史の間に病院が経験した幾多の困難を乗り越えることができたのは、地域の医療機関の皆様や住民の皆様のご支援のおかげと感謝申し上げます。

今後も京都第一赤十字病院が京都で一番の基幹病院として、地域の患者さんや医療機関から信頼されるように、職員全員が一丸となって努力してまいりますので、引き続きのご支援を宜しくお願い申し上げます。

地域の先生方との「つながり」を大切にしたい――。

そんな思いから、「絆」は一冊の小さな広報誌として歩みを始めました。

創刊当初は、診療科紹介や診療体制のご案内など、限られた誌面の中で試行錯誤を重ねながら、「顔の見える関係づくり」を目指してきました。



1994.04
創刊号表紙

2003.05 / Vol.19
カラー印刷へ

発刊を重ねる中で、地域の先生方から温かいお言葉やご意見をいただき、誌面も少しずつ変化してきました。診療内容だけでなく、連携の流れや多職種の取り組みなど、実際の診療連携に役立つ情報発信にも力を入れてまいりました。

感染症流行下では、正確で迅速な情報発信の重要性を改めて実感し、
地域医療を支える一助でありたいという想いを強くしました。



2006.04 / 春号 Vol.24
デザイン変更後表紙

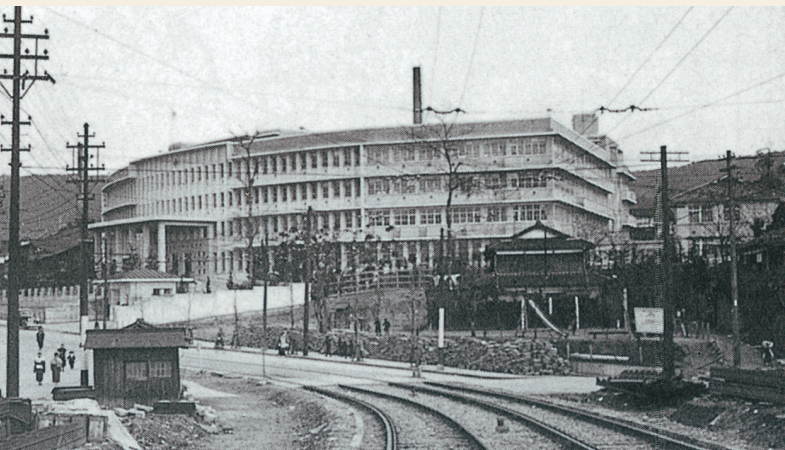


2025.04 / 春号 Vol.95
デザイナー変更後表紙



そして
Vol.100 を迎える

年表で見る、病院と 広報誌「絆」の歴史



1934 年創立当時

2026 年現在

1934 年 11 月

日本赤十字社京都支部
病院として開設

「人道」の理念のもと、
地域医療の歩みが始まる

1969 年 7 月

ICU を開設

重症患者に対応する
高度医療体制を強化

1995 年 1 月

阪神・淡路大震災

災害医療の重要性と、
人と人の“絆”の力を
再認識した

1997 年 11 月

救命救急センター・
総合周産期母子医療
センターに指定

京都の救急・周産期医療
を支える中核病院へ

2000 年 4 月

病診連携室 開設

2000 年の診療報酬改定
にて「医療機関の機能
分化を推進するための
改革」がうちだされる。
特に「病診連携の強化」が
うたわれ、地域の先生方
との“つながり”を深める、
新たな架け橋が誕生した

2006 年 4 月

広報誌名が「絆」へ
変更

岡名誉院長より贈られた
「絆」へ誌名変更し、「患者
さんとの絆、職員の絆、
そして地域における医療
連携の絆」をあらわす誌面
として生まれ変わる

2007 年 1 月

地域がん診療連携
拠点病院に指定

専門のがん医療を
地域へ届ける体制を整備

2020 年～

新型コロナウイルス
感染拡大

「ダイヤモンド・プリンセス
号」への医療派遣より
地域医療を守るための
対応が続く

2025 年 1 月

広報推進室 発足

“伝える医療”をさらに
強化する新体制へ

2025 年 3 月

ホームページ
リニューアル

「医療関係者の方へ」
サイトを新設、連携に必要
な情報を見やすく発信

1943 年 1 月

京都第一赤十字病院と
改称

地域に根ざす赤十字病院
として新たな歩みへ

1994 年 4 月

広報誌「京都第一日赤
だより」(現在の「絆」)
創刊

地域医療機関との
“つながり”を伝える
広報誌が誕生

1997 年 2 月

京都府基幹災害拠点
病院に指定

災害時にも地域医療を
支える中核病院へ

1999 年 5 月

第1回
病診連携懇話会

長年の懸案事項であった、
病診連携の強化と当院の
診療内容の情報公開を
目的とした会が発足

2000 年 10 月

「紹介患者様 FAX
予約システム」開始

大規模病院では京都初
の試み
地域の病院・診療所との
できるだけ裾野の広い
ネットワーク構築のため、
より円滑な受診調整への
挑戦が始まった

2006 年 12 月

地域医療支援病院に
承認

地域医療連携の
さらなる強化へ

2011 年 3 月

東日本大震災

全国の日赤の仲間ととも
に、被災地支援に力を
尽くした

2024 年 6 月

紹介患者 Web 予約
(SAKU 洛連携) 開始

Web 予約導入により、
紹介元医療機関での予約
券即時発行が可能に

2025 年 1 月

医療機関向け
公式 LINE 開設

より早く、より手軽に
情報発信が可能に

2025 年 4 月

広報誌「絆」
リニューアル

地域とのつながりを、
より深く・より身近に

2026 年 7 月

広報誌「KIZUNA(絆)」
Vol.100 を迎える

25年続いた“つながり”の
歩みが大きな節目を
迎える

紹介患者 Web 予約
サイトはこちら



公式 LINE は
こちら



1 京都第一日赤だより 「絆」創刊100号に寄せて



初代室長

藤本
莊太郎

ふじもと そうたろう

在任期間：
2000年4月～
2008年3月

小生が、2008年11月に第一日赤を辞して随分と年月が経ちました。無事に喜寿を超えてのんびりと余生を過ごす今日この頃ですが、突然、地域医療連携室25年を回顧する原稿の依頼が舞い込みました。77歳まで自治体病院の経営に関わっていましたが、その後はきれいさっぱりと医学・医療から足を洗い、過去の書籍や資料は大半を整理しましたので、認知症はないと信じてはいますがうる覚えの中で過去を回想しますので間違いがあれば失礼をお許しください。

地域医療連携室は、当初“病診連携室”の名称で竣工した新本館の1階で2000年4月に開設されました。1997年に「医療機関の役割分担の明確化と連携の促進」を骨子とする第三次医療法改正が公布されました。すでに提示されていた「地域医療支援病院の厳しい要件」や、2004年度からスタートする「新医師臨床研修制度」を考えますと、当院の急性期医療の質向上と医療連携の強化は喫緊の課題となっていました。当時の岡隆宏院長の指示で、小生が室長となり、MSWの藤原さん、事務の原城さんらが中心となり発足、2005年には看護部から米戸師長が加わってくれました。

まずは当院近隣の地区医師会の会長・副会長にお集まりいただき、当院が目指すべき医療連携について忌憚のないご意見を伺いました。開口一番、地元東山医師会会長の石居志郎先生から「藤本先生、第一日赤は昔から敷居の高い病院です。紹介した患者さんが紹介医に返されないとか、お亡くなりになった紹介患者さんの死亡報告がなく、葬式が出されているのを見て初めて紹介医が結果を知るなど、一人の開業医として忸怩たる思いをすることが度々あります。日赤内部での緻密な意思疎通が図れるシステムを構築するところから頑張ってください。」

石居先生とは、過去に第二日赤で一緒にした関係でしたので、ストレートに現状をご教示いただけたものと思いますが、この一言が当院地域医療連携室の組織作りの根幹となりました。医事課にも協力していただき、紹介患者さんに関する返書管理を徹底しました。多くの患者さんをご紹介いただく診療所には、米戸師長同伴で訪問して何かご意見がないか face to face の関係構築にも努力致しました。当院の外來診療と診療所の診療で併診する患者さんには、両医療機関の連絡先電話番号と医師名を併記した「共同診療カード」を携帯していただき有事の際の活用を促したりもしました。

病診・病病連携の促進には、当院の医療レベルを院外の先生方に理解していただくことが何より重要です。当院の医療技術や診療体制の現状を定期的に広報する医療機関向け広報誌「絆（きずな）」を季刊発行することになりました。絆の命名は岡隆宏院長です。記念すべき漢字は、たまたま当院にて療養されておられました泉涌寺第153世長老川村俊朝師に厚かましくもお願いして、篆書体（てんしょたい）で揮毫（きごう）していただいたものです。誌面は見やすいカラー印刷で診療科に止まらずコメディカル、事務部門に至るまでその時々院内トピックスを中心に編集され、今回めでたく100号を迎えることになりました。

当院の医療連携を深めるうえで最強の助っ人(?)が、2001年4月から加わりました。第二日赤皮膚科部長の前田基彰先生が突然(?)転勤されてきました。彼は小生と依田副院長とは大学同期入学でイヤというほど一緒に時間を過ごしてきた仲間です。超一流の話術と文才を持つ彼は、一般開業医には身近でありながら診断が難しい皮膚科診療を平易にレクチャーする能力があり、皮膚科単独の勉強会でも50人を超える参加者があるほどでした。

先生着任後には、小生が担っていました東山医師会理事を前田先生に交代していただき、医療連携を深めるために始めた「病診連携懇話会」には先生も加わっていただいて二人三脚で進めさせていただきました。地域医療連携室運営も楽しくスムーズに進んでいましたが、2005年10月残念ながら帰らぬ人となってしまいました。第一日赤在任4年半という短い期間でしたが、当院の地域医療連携システムの構築・成長の切り札として駆け抜けていただきました。故石居志郎先生にも少しは認めていただける地域医療連携室になったのではと思っています。

2006年12月には、紹介率、逆紹介率、救急応需など厳しい基準をクリアーして、京都府下第2号の“地域医療支援病院”に認可されました。小生は、第一日赤には12年間の在籍でしたが、京都府医師会の勤務医部会、東山医師会理事会への出務、診療報酬支払基金審査、地域医療連携室室長、薬剤採用の適正化、レセプト審査査定対策、電子カルテ導入、などなど外交と財務面の仕事を楽ませてもらいました。有難うございました。

思い出の1枚



前田先生が赴任してきた2001年秋に、信州の小海赤十字病院で病院長として経営に奮闘していた同級生の岡野康正先生（写真左）を依田（写真左より2番目）前田（写真右より2番目）藤本（写真右）の3人で激励訪問した時の当時55歳の頃のスナップです。

あの時、君は若かった～

2代目室長

こうの よしお

河野 義雄

在任期間：

2008年4月～2016年3月

「絆」をご愛読の皆様、ご無沙汰しています。2016年3月に副院長を辞してから丸10年経過しました。と言っても、2024年3月までは臨床検査部常勤嘱託として毎日出勤していましたので、実質的には退職して2年ということになります。今回、「絆」への寄稿を仰せつかりましたので、記憶を頼りに当時を振り返ってみたいと思います。地域医療連携室室長を拝命したのは18年前の2008年4月で、同年7月に第10回病診連携懇話会が200名程の参加で開催されたことを覚えています。その当時の第一日赤は、2006年12月に地域医療支援病院の承認を受け、大きく地域医療連携の推進に取り組んでいた時期であり、また2012年2月には全国でわずか90病院、京滋唯一の高診療密度病院群（DPCⅡ群）に認定され、超急性期病院としてもスタートした時代でした。他方、院内的には2008年11月に病院機能評価V5を受審し、2010年12月に第二次改築工事に着手、2012年9月にC棟竣工、2014年10月に管理棟竣工と、ハードとしての病院も大きく変貌を遂げた時期です。

C棟竣工に併せて発刊された「絆 特別号」が今、手元にあります。2頁にわたってC棟1階の正面玄関横に移転した地域医療連携室が紹介されています。実働メンバーの看護師さん3名ソーシャルワーカーさん4名、事務職員さん7名と撮った写真が懐かしい限りです（皆なんと若いこと！）。現在は、場所もメンバーも大きく変わったようですが、地域医療連携室が核となって実施してきた、地域からの紹介を受ける前方連携と地域へ戻っていただく後方連携を実現する病診連携や逆紹介、そして救急入院からPFM（patient flow management）に則り地域連携パスへと繋ぐ病病連携等・・・今では当たり前に行われるようになったこれらの体制作りが、現在までこの地域の人々の健康を守ることに貢献してきたのではないかと思います。

現在は、患者様の紹介等で第一日赤とお付き合いする立場となりました。他の急性期病院とのお付き合いもある中で、外部評価の役割も必要になるかと思っていますので、時々提言をしていこうかと考えています。そして第一日赤の皆様には、これからの地域医療連携はどのようにしていくのか、その中で連携室がどのような役割を果たせるのか、これからも常に考えていっていただきたいと思います。今後とも宜しくお願いいたします。



在任当時 集合写真

京都第一日赤だより「絆」
100号発刊に寄せて3代目室長 /
現 育生会
京都久野病院 院長

福田 互

ふくだ わたる

在任期間：

2016年4月～
2024年3月

京都第一赤十字病院「絆」の100号発刊おめでとうございます。私は2016年から3代目室長を務めさせていただきました。私が地域医療連携室の仕事をさせていただく中で思い出することとして、1つはコロナ・パンデミック、2つ目は連携と広報活動の強化に向けての取り組みです。

新型コロナウイルスのパンデミックに関しては、病院中が感染予防や感染患者の治療で大変な状況でしたが、地域医療連携室でも院内クラスターが生じて転院が全面ストップしたり、同室に感染者が見つかって当日に転院がキャンセルされるなどのことがあり、スタッフの苦労は大変なものでした。その中で、わたしはとにかく患者を呼び戻そうということで、絆を通して「基幹病院としての機能回復」を近隣の医療機関にアピールし、地域医療連携の「原状回復」を目指しました。その為の「情報発信」として絆を利用させていただき、「臨時増刊」を2回発刊し、上門事務副部長とともに主だった連携機関に自ら配布にまわったことを懐かしく思い出します。

2つ目は連携と広報強化の取り組みですが、急性期病院としての生き残り戦略として地域連携は生命線であり、そのために広報を中心とした「営業活動」が大切で、地域医療連携室はその最前線と考えておりました。そのためにメールでの情報発信や動画作成や広報誌「絆」の変革など試みました。連携医の先生方から、情報が遅いとか指摘を受けて、診療に関わる情報をメール配信したり、患者のいない休日を狙ってYouTube動画の録画に院内を回ったりしました。現在の京アプリやLINEなどの礎になったのでは自己満足しています。「絆」の変革に関しても、「構成やレイアウトが平凡かつ毎回同じでは目を引かず面白くない」「封筒を開けてそのまま机に積まれないようにするにはどうするか」などと担当の職員に無理難題を吹っかけて悩ませました（いろいろ勝手言ってますみませんでした）。現在、私は読者の立場で絆を見ており、かなり面白くなったと思いますが、まだまだ伸びしろはあると思います。手に取ったら思わず表紙をめくり、めくったらつい記事を読んでもしまうような「絆」が届く日を楽しみにしております。

最後に、京都第一赤十字病院が京都市南部の最高の基幹病院であり続けることと地域医療連携室・連携誌「絆」のさらなる発展を祈念いたしております。



当院の“想い”と地域の先生方の ニーズに合った「絆」を届けたい — いのちと、ぎゅっと。 —

5 代目現室長

岡本
和真

おかもと かずま

在任期間：
2026 年 4 月～



当院の地域医療連携課職員を中心に多くの職員・関係者がこれまでの「絆」にその時々様々な想いを込めて製作してきた結果がこの度の100号発刊に至っております。当院は地域の基幹病院として高度な診断・治療機器を有しており、さらに優れた診療スタッフ・職員が所属しています。その当院の強みを、「絆」を通じて地域の医療機関に情報発信することで地域の先生方から多くの患者さんをご紹介頂き、その患者さんたちに安全で高度な医療サービスを当院が提供し、そして患者さんには地域の先生方の元に戻って頂く、そのような関係を構築する架け橋となるのがこの「絆」です。

当院では地域の先生方と顔の見える関係をより強く構築するための院長肝いりの企画を昨年からはじめました。年1回だけの開催だった当院主催の病診連携懇話会を、当院に患者さんを紹介して下さるクリニックの先生方との懇親を中心とした懇話会と、当院から退院する患者さんを受け入れて下さる医療機関のスタッフとの懇親を中心とした懇話会との2回に分け、それぞれ合目的で充実した懇親・連携を図るようにしました。

さらに、2024 年夏には、外来診療における“完全予約制”を撤廃しました。これまでは、地域の先生方から当日受診のご依頼をいただいた患者さんについて、急病と判断した場合は各診療科の救急担当医が対応する一方、緊急性が低いと判断した場合には後日の受診予約をご案内し、帰宅していただくこともありました。しかし、地域の先生方が当日の受診を必要と判断されてご紹介いただいた以上、その日に診療につなげることが地域の基幹病院としての責務であるとの考えから、院長の号令のもと“完全予約制”を撤廃しました。現在も診療体制上、後日の予約となる場合はありますが、可能な限り当日受診いただけるよう対応し、地域の先生方との連携強化に取り組んでいます。この「絆」や懇話会を通じた地域医療連携で当院と地域の先生方とが Win-Win の関係になることを願い、当院の想いと地域の先生方のニーズに合った「絆」を今後も先生方のお手元にお届けしたいと思います。

最後に、これまで「絆」を育てて下さった歴代室長の先生方、先輩方、そして関係職員の方々に感謝しつつ、これまでの皆様の“想い”を引き継いで今後の「絆」をさらに充実させ、地域の先生方との連携をさらに発展させていきたいと思っています。

地域医療連携室室長としての 歩みと今後への期待

4 代目室長

高階
謙一郎

たかしな けんいちろう

在任期間：
2024 年 4 月～
2026 年 3 月



2024年4月から2026年3月まで地域医療連携室室長を務めた高階謙一郎です。前任地の病院でも同様の業務に携わっていた経験があり、紹介・逆紹介の推進、地域医療機関との関係づくり、患者さんの転院・退院支援などについては、一定の理解を持って取り組むことができたと思います。一方で、地域連携は病院側の都合だけで進められるものではなく、地域の開業医の先生方のご意見を丁寧に向い、病院として何を求められているのかを把握する姿勢が何より重要であります。また、地域医療構想をはじめとする医療提供体制の変化を踏まえ、急性期病院、回復期・慢性期医療機関、診療所、介護・福祉関係機関がそれぞれの役割を理解し、地域全体で患者さんを支える連携体制を構築していくことが、今後ますます求められるものと感じました。

私自身、京都府医師会理事としての立場もあり、開業医の先生方の率直なご意見を、地域医療連携室とは別のルートでも聞く機会が多くありました。その中で、病院側の姿勢によっては、地域連携は決して円滑には進まないことを強く認識しました。病院には病院の事情がありますが、診療所にも日々の診療の中で抱える負担や不満、期待があります。そうした声を受け止め、改善につなげていくことも、地域医療連携室の大切な役割であったと思います。

一方で、「ぜひ患者さんをご紹介ください」とお願いに向いながら、実際に紹介を受けた際には満床などを理由にお断りせざるを得ない場面もありました。地域医療連携室室長としてだけでなく、救命救急センター長としても、大変恥ずかしい思いをしたことを覚えています。紹介をお願いする以上、受け入れる体制を整えることが本来の責任であり、地域からの信頼は、言葉ではなく実際の対応によって築かれるものだ痛感しました。

今後、病院と地域が対等な立場で意見を交わし、患者さんを中心とした連携体制がさらに発展していくことを期待しています。